

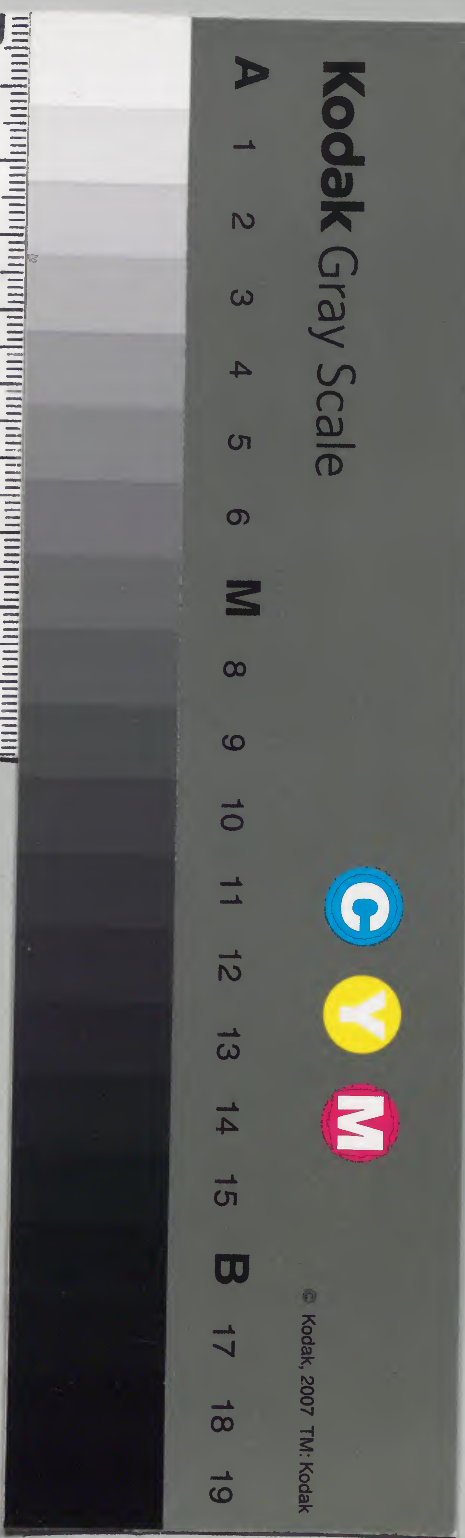
日本書紀傳 卅一卷

和書
一〇五二二號

百三十三

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (141)	
函號	特	85 1

内三六八三編



教
庫
印
省

大
同
書
庫

南
庫

内一六八三號

を正して天之逆手の同ト言ふより打様亦順と逆と
 の異あり事をおむ明らめ知べりける之逆手ハ
 船を青柴垣小変む為の呪術あり云々注して伊勢
 物語ありを一小為り此ハ順と逆との差
 有る事を思漏されたるが故あり且此ハ事代主神の
 國土を避奉り世給ふ悦びを聞えさせ給はむと爲
 させ給へるなり彼呪詛亦逆手を打返す也ハ大
 趣異ある者あり思混ふる事勿れ其呪術ありハ後成
 恩寺殿の故小地神四代彦火の出現尊の兄の火闌降
 命の鉤針を失給ひて海中を行つて取つて給ふ時海神
 の教小く様給ひて是より人々を呪ふとて手を後
 手小擲返給ひて是より人々を呪ふとて手を後
 小遣して加事有り其事を天之逆手拍つて云ふと注
 させ給へり實小呪術あり其原を此小取れるある
 可けれハ天之ハ海士之小て中古より海ノ事を然云
 此ハ右の六百番歌合なる其義小て天之逆手を訓
 詠るハ在りて海士の逆手ありけり記傳小引
 此ハ契沖縣居二師の説ハ大旨右の御説小依れり

○日本書紀傳三十一

○五百五十四

者ハ見元レル也何レモ事代主神ノ天之近キニ
海神宮段アル後子トモ一ノ爲ニ説クウケルハ共小
叶ハガ
○使者既還報命ハ次小説ヤ

古事記曰。故尔問其大國主神。今汝子事代主神如此白訖。亦
有可白子乎。於是亦白之。亦我子有建御名方神。除此者無也。
如此白之間。其建御名方神。于引石擊于末而來。言誰來我國
而。思思如此物言。然欲^爲力競。故我先欲取其御手。故令取其御
手者。即取成立冰。亦取成劍刃。故尔懼而退居。尔欲^取其建御名
方神之手。乞歸而取者。如取若葦。搯^批而投離者。即逃去。故追
往而。迫到科野國之洲羽海。將殺時。建御名方神白。恐莫殺我
除此地者。不行他處。亦不違我父大國主神之命。不違八重事

代主代主神之言。此葦原中國者。隨天神御子之命獻。

此傳ハ御紀小ハ凡テ漏サレタリケルヲ古事記小幸
小遺存レルヲ此小抄出テ注サズテハ此國辭ノ件
この者共小大ニ盡サレテ所有を以テ抑^{建御名方}此神ノ御
事ハ一ト持統天皇五年御紀小八月己亥朔辛酉遣使
者祭龍田風神信濃須波水内等神ト有テ唯一所出ル
ものニおれども後の正史小ハ其神社小就テ事共
ハ傳ハレども如何なる由小依テ其國小鎮坐ス
云事詳ありざりけり古事記ニ如此傳ルルニ天神
本紀小其を抄録セリ此二のト有テ近頃鈴屋大人

の記傳世小出たる小依り人々然ハ知事成此を
を猶神代紀のこを固く執る輩ハ今も異多一傳小
爲て措くめり又紀記の二典を合せ讀む人絶て世
小無ハ非此小事代主神の如く速く小避
奉るせざり故を以て荒振神の列と爲す事小在
れども其ハ父兄の神等と諸共小國土を造固めさせ
給へるを以て謂れ無く奉ると思ふ深く考ふ坐るの誤
る小其小國造小功有程想像り聞ゆ可信
濃風土記信濃國者往昔建御名方等之所任也之地也治天下
御神大穴持命又少彥名命建御名方命巡行此國給到

坐阿羅野詔此國者木葉草垣葉品也故云品野今云
信濃者音之轉也所見此を以て其太略をハ
曉る可きなり記傳十四二十小大國主神より亦我子
有建御名方神と申給へるを以て見れば此神と事代主
神ハ亞て天下小威勢有し事知ればなり近ハ此
然る小世小此神の御過失のこを傳へて御功績の
事共を知らるが故小止む事を得ずし今茲小注
さむを贅言ありと爲て見過す事勿れ此小就てハ國
るざりける其神の常より説及ぶ非ハ得難き
事あるが故小記傳の委しき説有上小注す事如
此一出來先此建御名方神の御祖の事より明らめ
れる者なり

ハ口試小事代主神の國
邊を去り次小第建御
名方乃大神隨信濃
國部乃大神是也
有る見れば古人
其傳無き事足出
事小思へり

奉可きなり出雲風土記小島根郡美保郷郡家正東
十七里一百六十四步所造天下大神命取高志國坐神
意支都久辰爲命子傳傳都久辰爲命子奴奈宜波比賣命
而令産神御穂須美命是神坐矣故云美保と見え
る是より其沼河比賣命の父祖の事を先明む可し
此小就て地神本紀小大己貴神の御児等を注せし件
小次取高志沼河姫生一男児建御名方神坐信濃國諏
方郡諏方神
社と見え熱田神社記小高志沼河姫信濃國下諏訪神
社也と見えたる此より其御母子の説を得又其御穂
須美命建御名方神一神を説を得る事已し傳

十四百五十九百
十九丁三十丁
小注せらる如し然し御穂須
美命と申す此本書及一書共小謂ゆる木花開耶
姫命の生坐る御子小火闌降命坐を火進命と申せ
る小等しく又火明命と申す小尾張連の祖なるハ別
小て天火明命と申す由傳三十百
十丁小注さかく
れば右の三名共小同一神の御名小坐る小等しく此
より御心の火の熾進せしる状小健く権るしく御在
坐る由ありけり故其穂ハ神功皇后元年御紀の神託
小幡萩穂出吾也と有を始しし思ひ外小表る事
を穂小出ると歌詞小多く詠る是なり須と美ハ進の

字小當り素戔鳴尊の須佐又須勢理毘賣命の須勢
理此小同ト此神の此小然欲為力競云々天神の御
使と申せどと畏はせ給ふ事無く進出させ給へる御所
為共を以て其御名の義をバ説つ可右の火明命を
火闌降命の亦
名と為る由ハ下百十ト云べし其天火明命
と申すハ此第八ノ一書及古事記小見えたる如く小
天忍穗耳尊の御子小
坐て本より別神なり然して播磨風土記を見ると小
磨郡伊和里昔大汝命之子火明命心行甚強是以父神
患之欲道備棄之乃到因達神山遣其子汲水未還以前即
遁去於是火明命汲水還來見船發去即大瞋怒仍起風
波追迫其船於是父神之船不能進行遂打破所以其彼

丘琴落處者即号琴神丘箱落處者即号箱丘櫛匣落處
者即号箱匣丘箕落處者仍号箕形丘甕落處者仍曰甕
丘稻落處者即号稻年礼丘曹落處者即号曹丘沈石落
處者即号沈石丘網落處者即号藤丘鹿落處者即号鹿
丘犬落處者即号犬丘蟹子落處者即号日女道丘尔時
大汝神謂妻弩都比賣曰為道惡子返遇風波被太辛苦
哉所以号曰瞋鹽曰苦濟云々事見えたる此火明命と
申すを右の御徳須と美命と聞ゆると一神小御
在坐ける然るハ火明と申すハ右小心行甚強と云ハ
大瞋怒と云ハ御船を打破と云ハ惡子と有るど何れ

と御心の進り、小御在り坐よりの御荒び有りけり
ハ^六矣の直小照明る如く神性の敏捷小御在り坐る由
小御徳須美命と申す御名小御通ハせ給へるを
思ふ小決く同神小御渡りて給へる状有り若て其御
祖琴都比賣命と聞えさするハ其沼河北賣命の御事
あり由傳三十^十百^下小己小委一注せるが如し又
風波を起し給へるあども建御名方神小御大由
有り下五百九十九^下小注せるが如く信濃國諏訪神
社小風祝と云有り^下諸其琴都比賣命と琴都ハ奴能都
こ云事小沼河ハ瓊之河^{コノカ}又瓊之津^{コノツ}と云
ありけり其神の御在處あり越後國頸城郡より直向

不能登の國名と其神小因て起れりあり可し但其國
本ハ越前國の郡名あり^一が後小一國の名不成れり
ありけりハ其郡名の起を此小係べきあり神名式小
能登國能登郡能登比咩神社御在り坐ハ其ヤ神の御
在り坐り所あり^一依て其地名と成り且一郡の名小
不成れりありけり今能登部村と云小坐す由ありハ
能登女と云事小能登比咩の略あり可し又同神郡
能登生國玉比古神社ハ其沼河北賣命の妹小御在
り坐あり大己貴神小御渡りて給へる小其能登の言
を冠りて申す事實小所以無り^一然して其鳳皇

郡神目伊豆伎比古神社と申す有を社傳小此神の御
在し坐す七尾の邊を諏訪海と云ふ明神此所小産
此給へり御産所の趾を小屋の間と云ふ産屋の水有
り又圓宮と云ふ有り云々云々其諏訪神を鷓鴣
草昔不合尊なる由小語傳ふる由ありければ其尊
の此小生出させ給ふ可事の本より有べく非り
ければ此所が其沼河北賣命の建御名方神を産給へ
りし地ふい在ける其神目ハ發語ハ稜威ハと云ふ
續けるありければ稜威君彦神と申して其亦名小
御在せらむと知べうとず備其御子を昔不合尊と申

すふし由ハ有けり其羽咋郡氣多神社名神ハ傳三十
十百ハ小注ハが如く大己貴神ハ渡らせ給へる小
社説小初午ハ能登生國玉比古神社へ神幸有て二
夜在り還らせ給ふハ幡村の内小捨子後ステゴレと云所小
往古御子を捨給ひし縁ハ由り御輿の鈴を鳴すあり
云々十一月申巳日ハ鷓鴣祭あり鹿島郡鷓鴣浦村の鷓鴣を
捕り午日清夜して己尅神前小放つ其鷓鴣自然本社ハ
階を上り戸帳の前小羽叩いて跪く所を捕りて海
小放つ此鷓鴣越後國頸城郡中山神社能生權現の磯小
依たり時其社の祭礼あり傳云北島神ハ此鷓鴣磯へ依給

ひて一宮神と夫婦成給ひし御中善ハしうも非
 ければ越後の能生へ飛給ひて或社地を借て住給
 ふ小因れば云り其北島の女神と云ハ此沼河北賣
 命の御事あり可し又御子を捨させ給ひし右の播
 磨風土記小火明命心行甚強是以父神患之欲道棄之
 有合り又其女神の鵜磯小依給ひし由を以て其
 御子を鵜磯草菅不合尊と云ふ小此計の誤ハ必
 小をむ可りさ事共あり其鵜磯の事ハ名勝志
 小鵜川村の磯小依地
 云所有り此辺は昔鵜川の大神の神体葉付の大根
 依藤小末に依給ふ神地多り今鹽濱小成て有り此出
 崎を小倉端と云ひ因を櫻本園と云ふ木花開耶姫命
 あり云と云り木花開耶姫命由無し其御子を御徳

越後國頸城郡茶
 川神社黒山山未小在
 三島郡鶴川神社黒山
 神山申せし黒山大明
 の事小就考ふ可し其
 事傳三十卷百下注
 せり云信

又神名云トハ御事
 方雷命見たり
 宿其事小傳と給へ
 云ハ聞り

磯

須と美命と申し亦名を火明命と申し申せり其御
 母ふれば然る神と僻心得しつるあり可く又大根依
 藤と云し其御父大國主神を俗ハ大黒と云て依を敷
 き大根を傍小置たり奇しき像の有り思寄れる俗
 傳ふしや有む此を以てし其女神ハ沼河北賣命小坐
 下事灼然者あり又此郷を鹿島と云ハ和名抄ハ能
 登郡加島加之万と云る是るが万葉十七卷小能登
 郡從香島津發船云々香島欲里久麻吉于左之底許久
 布祢能云と詠る此所あり此香島若常陸國の鹿
 島小由有むむ小建御名方神の出雲より逃給ふ時
 其本居ありを以て此小行巡りり其建御名方神
 逃給へるを逐給へる跡と爲むり其建御名方神
 申す名ハ字あり方ハ畫なり此時押並て世小書契
 と云程の事ハ非くめども物小書し附事計のの争りハ
 無らざる可き常ふ小予が云る加く大己貴神ハ天下
 の大國主神小渡り世御在し坐せば謂ゆる國土の主

宰つ御在し坐し事代主神ハ其御前ノ事ヲ執シ申シ
給ヘルハ申シ食國政ヲ大夫ト當ル世ニ給フ可ク然レ下
照姬命ハ亦名大倉比賣命ト申シて天下ノ
貢物ヲ奉ル其大藏ヲ主ス給フ御名ヲ事ハ已ハ
傳三十上十百四十十注セルカ如シ其所ヲ引ル
古語拾遺雅朝倉朝改諸國貢調年ニ盈溢更五大藏
と有テ下出納其物ト勅録其簿トの三册識有リ此
小取テ攷ル其大藏ノ志ハ神大己貴神ヲ檢校ハ事
代主神ヲ出納其物ハ大倉比賣命ヲ勅録其簿ハ
建御名方神ト配シ今試シ説見ル其往昔ハ此計

の御備御在シ坐シ事代主神ハ其御前ノ事ヲ執シ申シ
文字の説近代諸家共ハ云所カ如何ハ在ト云
實説カりけり釋ハ於和字者其起可在神代歟ト鳥ト
之術者起自神代所謂此紀一書之説陰陽二神生蛭見
天神以太占而卜之乃卜定時日而降之無文字者豈可
成下哉作者事温筋可在神代者幽玄而難測ト云テ
文字の起を神代ト取ハ實ト謂レルト説カリ太北即
神代文字の始カ由ハ傳三十百四十ト云ベリリ
けれハ其を措キて假字例ノ後序ト倭國字謂之假
名略或曰大己貴命云々云以和漢三才圖會ト或書

云天照太神告大己貴尊其靈句曰略大己貴尊與天八
意同意以此言造神代文字以是四十七字通連作方言
句今以秦字代於神字云其天照太神告大己貴尊
其靈句云ハ少彦名神云ハ大己貴神ハ天上の
太占の傳ハルを云ふ可一ハ大己貴神ハ天八意神
同意以此言造神代文字云ハ天上ハハ太占ハ
依て一種の神字出來ルハ小合せて國土ハ其據
所同トトテ神字ハ出來ルを云ハリ聞中篇中抄
小母假字の事を出雲假字云ハ五十音韻圖を彼國
小傳ハ出雲音云ハ以テ神代文字の製の事專大

己貴神小係ルを知ベクナリ
其一部者和漢之字相雜用之其一部者專用假名和言
之類ト有テ詔ゆる假名日本紀是あり又云ク師說大
藏省御書中有肥人之字六七枚許先帝於御書所令寫
給其字皆用假名或其字未明或乃川等字明見之若以
彼可爲始歟ト有テ本朝書籍目錄ハ肥人書五卷見
えたり或人の神代清地傳ハ引リ河波國某社ト傳
ル由あり予が見たり出雲國日御崎社ト傳ル
是一種あり鹿島社宝庫より出たりト云ハ一種あり
少神字日文傳ト云ハ平田氏ト彙たり外ハ猶種ト云
神字在ト雖ト疑ハリ物少クハ後人をして
撰正トシ然リて名ト云ハ傳四十五三二百ハ注
めむト云ハ如ク土地を云祢ト其土地ト就テ爲業有リ其業
ト云ハ成寸小依テ人ト名有リ其名有リ依テ其物其
事供ト成を以テ物ト名有リ謂是命リ文字を名ト云

も其を記す所以の器モノふれば、有り諸中古コノ漢字渡
参来りて以來神代カミヤマトの文字ナリハ悉く絶果ツツたるや如く成
て彼の文字を指して眞字マコトと云ひ其小依コヨて此方コノと作
れる色葉イロハを假字カタナと云ひ又片假字カタカナと云物出来ウケれど
も皆我われが古名コナを襲ウケひたるあり空穂藏ソウゾウ開中カク十八ハチ小唐
の色紙イロシすり中ナカより押折オシオリし大の草紙クサシ小作りコ作りて厚字コトシ三
寸計サンスンより一ヒトハ例タテマの女メの字ジ二行ニギョウ小一方書ヒトカタガキ一ヒトハ
草行クサギヨウ同ト如ナド一ヒトハ片假字カタカナ迎年ムカヒトシ一ヒトハ草字クサジ先例サキタテマの字ジを讀
せよせ給たまふ堤ツツミ中納言ナカノリ物語モノガタリ小未假字コナカシハ書給カキタマハされハ
片假字カタカナ迎年ムカヒトシ那ナふ云イハと有アハ俗ソコ小云イハハ片假字カタカナの事コトふてハ

有れども其物モノ已ナ小替カりしごと其名ナ猶本ナドの任タテマふる小
て迎多ムカヒタハ太占タウチの町形チヨウガタを云ひ迎年ムカヒトシハ神名カミナふる小出
たり源氏タケナリ梅枝ウメエハニハ万マン事ジ音ネ小ハ劣セウハ様サマハ淺シヤハ成行セイギョウ
く世ヨの末マタふれど迎年ムカヒトシ那ナのナあむ今世イマヨハ其際キセ無ナハ成
のたり又マタ十三ジュウサン麻年アサトシ那ナの進シメとル程タテマ小迎年ムカヒトシハ無
テ文字ナリこノ交マらめれとて見えたる麻年アサトシ那ナハ占ウチ字ジ
小テ其町形チヨウガタより字形ジヨウガタを成ナせるハ同ト神字カミジと雖ナド小固
く強ツヨクハ故ユヘハ其名ナを取トルて唯タダの文字ナリを眞字マコトとハ云ふ
り又迎年ムカヒトシ那ナハ神字カミジ小テ神代カミヤマトの字ジを云ハ色葉假字イロハカタナの
体タテマ其小似ニドシたるを以モて然シカ云習ナラハ一ヒトハナりて此コノを假字カタナ

と云ハ言リ略ある者あり然ルハ漢字渡りて以降の如く押並て世小此を用ふところハ非る物ノ目標と爲る計ノ事ハ神代小必有つる事何より疑ハ
しる可き或説小科斗書ノ事ヲ梵小摩那書ト云ハ加那跋多書ト云リ然ルハ神代小麻牟那ト云事ノ有レを彼ト傳レる少ヤト云リ此漢字を此小麻那ト云レ我ガ古名を借テ用レられたる者ありト云ふ一ノ證小亮ベシ又述を牟牟年を述小方ハ畫カ通ハ一云事常ありけれバ必麻述那あり
カト云ハ寶鏡開始章第一一書小宜圖造彼神之象而奉招禱也ト見エバ此を古語拾遺小日像之鏡ト有
ウ已小神代小物小畫ノ事何無ト云ハ何ガ斯ク傳ハ有テ大御歌雄略天皇四年御紀小儺我柯陀播於柯

武甕岐豆斯麻野麻登詠世給ヒ天武天皇御紀小圖字を迦多ト二所小用ヒル礼又太古ノ所形を云ルハ
万葉十四ト武藏野ル字良可多也伎又
伊毛我名可多尔伊氏年可母十五
能保都牟乃字良敬牟可多夜伎豆有テ太古ノ象形ノ本カル事ハ云ト更存リ口訣小神代文字象形也
ト云事思合可一傳十六
記小秋鹿郡息曇郡家東北九里廿步須佐能乎命御子磐坂日子命國巡行坐時坐坐此處而詔此處者國稚美好有國形如畫鞞哉吾之宮者是處造事者詔故云惠

二ヶヶ播磨風土記
神島伊力島等所以神
神島者此島西に有る
神形似佛像云々有る
記し

伴神亀二年 見え又惠曇中即有彫鑿盤壁二所所
厚三大廣一丈高一尺一所 有て富音物小畫形を
厚二丈二尺廣一丈高一丈
彫事ハ有る其外諸國の山岳小神像を石以て
造れるが多きを後小釋徒の有と爲る物皆神代遺
物よりて佛像より非るを以て神代小畫事の盛
小在一事を知べきあり古今秋下小吹上濱の圖小云
又又仙宮小菊を分て人の空れる圖を詠る又菊花の許
あり人の人待る圖を詠るあど見え其後の歌物語小
數知す多在り然して右の如く分云ふ時名と方とハ別ありと其神字ハハ太占の町形より出
て象を成せり物ありけれハ共小相離れざる所以有

六神五武健御名分
命神一々方に
當り然と記し

て字名即畫カダと成り畫即字トと成て共小其源を別小爲さ
る者あり西戎の文字も然り説文六書の法小象
如きハ本象形ありしを後小文字小成て用ひたる
あり漢の皇國の世の始ハ斯る事共小て万ハ簡易か
る事小有けし 倭建御名方神ハハ右の如く名と方と
小功富給し神御在り坐けれハ万小甚く言痛神
性小こりハ御在り坐たりけめ此より以前小天穗日
命の久しハ天降りせ御在り坐て御父大神と何ハ此
の御語り共御在り坐けるを此神ハ示し聞え
させ給はごりけり少の此小經津主神武甕槌神天
降り來給ひて大國主神小神問し給へりけり小御兄

事代主神の御許小天神の御使を兼て父大神小の使
者を遣一て事代主神小令問レれける小此神小未
其事小及バ世給ハざりける一借事代主神の三穂小
御在一坐ける遊行の爲小其地小客居セせ給ハ
小ころ有レけル其地ハ此神の亦名御穂須美命と
聞エさせテ其御往處の由を以テ美保の郷名ハ起レ
事右五百五十六小風土記を引テ注セるハ如一其主神
たる建御名方神小知セず一て事代主神と密小謀
ご一せ給ハるハ以テ怒ルせ給ヒ此二神の御前小坐
る一誰來我國忍レ如此物言のむめハ出サせ給ハ

公亦不違我父大國主神
之命不違入重事代主
神之言ハ中給ハるハ先
之二神 御論共有一を最
出申さレ給ハるハ其
御レ時ハ有レ其ハ事代
主神ハ歸順ハ言ハ以テ
御父大神ハ教示給ハ
天神ハ御使ハ拒レけル
故ハ

るありけり此小大國主神の亦我子有建御名方神除
此者無也と申ハせ給ハるハ先事代主神を順一の仕
奉り其後小此神を順ハせ仕奉一めむハ遠慮の御
在一坐けル状ありハ右等の事共有テ此神の遠ハ小
兼伏き奉ル事ハ恐レれ御在一坐ハ故あり然
して右の二神小追迫ハれ奉りレ已小殺ス心ハ爲ス
せ給ハふハ及バぶハ御父大神ハ捨置セ給ハるハ
下注右の二神ハ此神ハ降給ヒて伏罪ハを申給ハるハ
下注小天神の大命を畏レ奉ルせ給ハるハありハ小
如何小爲テ其神を天神小歸順ハせ仕奉りレ給ハ
むハ思ハふハありけり若テ此神の始ハ程ハ御穂須美命

六申すも神目の後成
こゝに義の御名
て初くすも甚可畏
神はこゝに御座し坐す

こ申して神性の甚く健り進ませ給へる神は坐か故
小右小注せる如く其生出給へり能登國ふて己小
棄るれ給ひ其後の事ハ播磨風土記小心行甚強父神
患之欲道棄之云事ハ有て甚く御心ハ外ありけ
る状ありしと生長るせ給へるも隨ひて國造の
御事を助奉る水一状ある小猶神性の強き事ハ此
世給はずして此時の事小至れを極むとて天神
小歸順ハせ奉るせ給ふと爲て其父兄の神等の命
小違ハせ給はざる由を明らめ申させ給へり此よ
めして天神御子の守護神と爲て天下小幸給ふ御恩

頼の大御在し坐す事下六百五十三下小注一奉れを見
て曉る可き者ありし世の識者此神の一度の御過
ハ何時迄も然る物ハ心得るこゝろ淺く申せし此神の
御祖父小て渡り世給へる素交御尊と申せども其始
ハ神性の雄健ハ任小物爲給ひて惡しき御行共ハ様
る小御在し坐けるが天上小て子座置戸の解除小遇
奉り天降る也御在し坐ける後ハ御功業ハ一ハ天
下小ニ無く甚しき御事小て御在し坐す事ハ
の能知れるが如し其を始の惡事を取出して惡神なり
と云て可なり也吾るず此神の御上ハ於て然り
己小天神小歸順ひ奉るせ給へる上ハ諸の天社國社
の皇神等と等しく皇御孫尊の大御守護の神小て渡
り給へる物を如○故尔問其大國主神今汝子事代
主神如此白訖ハ二神より稻背脛命の復命せら事代
主神の言を以て大國主神小問ハせ給へるなり但其

上文小語其父大神言恐之此國者立奉天神之御子也
有て此小也我父直當奉避吾亦不可違也有て其報告
ハ事代主神より父大神へ申させ給へるあり下クハ事
事代主の避給へる後小使者既還報命故大己貴神則
以其子之辞白於二神曰云々有か如く其報告の辞
を以て二神小申させ給へる其大己貴神の言を受けて
今汝子事代主神如此白訖云々宣ひ入て再神問の
御事御在し坐る小て二神は大己貴神との御問合如
此く懇切小御在し坐るを誰し二神より大己貴神
へ迫り給ひ大己貴神より二神小拒める者の如く

云も一思も爲めら何れの方小就て其允當の説
ありざら者あり二神の大己貴神小神問の御事
共あり然して二神の言向させ給ひむと志し給へる
ハ殘賊強暴横悪之神の事あるを一見と爲し其
差別の見え別れ〇亦有可白子乎記傳十四一二十小
白こハ上小僕者不得白又事代主神是可白あり有る
白こ同くして詔命の御答を申す事あり事代主神の
餘小詔命を宣聞令聞て其答を白す心を問聞てさ
子有て問ありと云れたるか如く〇於是亦白之ハ
記傳云く上小事代主神の事を白して又今一神有
る事を云ふればあり備其言小亦我子云くと有る亦

この差別のこふて實ハ別神小坐ず下照姬命高照姬
命ハ同神異名あり然る時ハ此の御答も下照姬命
ハ有べきを其ハ同神小坐し殊小事代主神の御同母
妹小て渡らせ給へルハ異なる御心御在し坐べき小
非ず斯りけれバ此小其可否イテをも申給ふイテ云ハ實小
此神のこふ御在し坐りけり其餘の百八十神ハ
其記下六百六十一注即八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者違
神者非也と申給へり由見えたりけれバ此小其建御
名方神を撰出て其名を申給ひ除此者無也と申給へ
るを以て其御子神の正しきをさへ不得る事妙ありと

も妙あり記傳小云く除此者無也とハ子の猶多小在
ハ無しとあり餘の御子等ハ問ハバ此神を除く餘小
ハ在ぬ可きありと云ルハ本々問ハバ○如此白之間
ハ記傳小大國主神の如此白給ふ時ハ建御名方神
物より來坐るありと云れり此來坐る所以ハ右五百
六小注六十一如く出雲國美保郷ハ此神の住坐る處カ
少然る小此海小遊び小御在し坐ける事代主神の許
ハ稻背脛命の御在し坐ける小御兄事代主神ハ一也
天之逆子を打成て八重蒼榮籬小隱り御在し坐ける
を不審しと伺居給へり其稻背脛命の復命し給へり
小引續きて來坐る故小二神と大己貴神と僅小御問

答の御事の未竟も果給はざりし程あり故に如此白
之問^間の傳りたるありけり○千引百の傳十^{二百}
注せり即千人所引磐石是あり○千末の傳十^{百七}
下云り○擊の靈異記に佐々直氏に訓り記傳に擊
ハ刺擧の切たる言ふて此ハ手を高く伸て其末小擧
るを云り俗にも手を高く伸擧て物を持を佐須と云
り傳如此して來坐る所以天神の御使の來て在る
事を已く聞給へる故に己が勝れたる力有る事を示
せし其御使を令懼むしてあり此所爲既の詔命に服
從ざる心ありしと云れさ右に引らし播磨風土記に火

明命心行甚強是以父神意之欲遁棄之略^中即發船遁去
於是火明命汲水還來見船發去即大瞋怒仍起風波追
迫其船於是父神之船不能進行遂被打破^中略尔時大汝
神謂事努都比賣曰爲遁惡子返過風波太辛吾哉^略
有て此神の未却き程して御在り坐るる小瞋怒之給
ふ時ハ大風波^波を起し追迫て御父母二神の來給へ
る御船を覆し給ふ計の御力坐るる故に千人所引磐
石を手端小擊て來て天神の御使の力争を爲むと思
ふて御在り坐けるあり傳此時小其建御名方神の擊
て御在り坐ける岩^{こゝに子に去年見たりし}小稻佐浦より日御崎に至る海

記傳四下今稻佐浦
の源、磯島と云有り大
の宇都御伊島と云此
島は世に大なる名有り
是神に小御守を方神
の手末、小御守を其方
に列するなり云傳、此
を見えたる是なり此を
以て

今世計り深き心御
在一年々状小聞え

中、唯一枝の任、小島、成り、磯島と云る是、
此神の御力の大なる事、此を以て知て、雖、亦
二神の御力の起させ給ふ御事、幾等、勝らせ給ふ
も甚く可畏き御事ありけむ、次ある欲為力競の
所、小云事有り合せ見、可きあり、
記傳、小此所為既
不詔命、小服從、
次、小思、如此物
心ありと云れ、然事あり、
言と申給へるを思へ、未、事、
知、世、給、
己、力、を、持、給、へる、意、不見、え、
○誰、記傳、
多、禮、曾、と、訓、べ、
多、曾、と、云、
古、言、
非、ず、
朝、倉、宮、
大、
御、歌、
小、多、禮、曾、
意、富、
麻、幣、
尔、麻、
表、
須、
万、葉、
十一、
十五、
小、誰、
此、乃、
吾、
壁、
戸、
來、
喚、
足、
十、
根、
母、
尔、
所、
噴、
物、
思、
吾、
呼、
十、
四、
二十

小多禮曾許能屋能戸於曾夫流尔布奈尔和家世乎
夜里氏伊波布許能戸于催馬樂淺水小太礼曾古乃名
加比止太天、美毛止乃加太知世宇曾己之止不良比
尔久留也沙支牟太知也色景歌、我世誰曾常在牟
と有り、備此、天神の御使、事、能、知、あ、故、
思、め、さ、し、誰、ぞ、い、云、なり、如此、云、小、答、む、意、有、り、今
世、小、人、の、所、為、を、答、む、小、誰、ぞ、い、云、なり、
補、見、え、
意、
たり、但、多、曾、と、云、古、言、非、ず、と、云、れ、つ、れ、と、然、
ぬ、
め、
の、
差、
異、
の、
見、
え、
難、
き、
時、
を、
云、
あり、
又、
源、
氏、
花、
草、
卷、
小、
甚、
切、
貪、
つ、
け、
此、
誰、
ぞ、
宣、
へ、
後、
拾、
遺、
雜、
二、
小、
人、
の、
局、
を、
思、
ひ、
て、
叩、
り、
れ、
け、
る、
誰、
ぞ、
問、
待、
り、
け、
れ、
ハ、
あ、
じ、
も、
見、
え、
た、
れ、
ハ、
多、
禮、
曾、
の、
略、
と、
こ、
り、
聞、
ゆ、
ハ、
○、
來、

公統天皇七年御紀
小宮倉庫中之稿

我國而、我が主領さ居る國、小來り有り、御父大神ハ
天神御子の所知食せ御在し坐む為小此國小造固め
させ給ひ天神の大命ハ、我御子の所知む國ノ事依
し奉る也給へる事ノ意を能く知給はず一向小我國
と思ふ、
思ふハ志奴昆、
言小戀志奴夫也、
此ハ志奴夫ハ、
少神武天皇戊午年御紀、
皇前御紀、
小宮設兵雄略天皇十四年御紀、
小宮遺舎

繼体天皇元年御紀、
小側隱此有戀不相、
一隱庭戀而死、
隱ハ、
ハ同卷、
為神樂歌、
可波也、
仁此歌古今集、
依來志能備、
云ハ、
然事有、
為、
大已貴神ノ用意

三徳志次人隠す
夫の事多し相違ひ
聞ふ事多し相違ひ
注ふ事多し相違ひ
隠す事多し相違ひ
其類小爲事多し
其類小爲事多し
其類小爲事多し
其類小爲事多し
其類小爲事多し

給ひて始り此神の隠し忍びて神議せ給ひ
けり故あり故五十田狭之小汀の神問の更あり
三徳之碕の事代主神の畏しを申給へるあり
事を知りて給はず今より打出むと爲る所を來給へ
る故に我の聞せず爲すて密事を謀るよと父
大神への恨をも兼て如此に云答めり此たりありけ
り記傳小忍の重ぬ云一度のこありず遍重ぬ
意有り此御使の記の趣は此處に來坐る事只一度
ありども又無き重き事を定むる度ありバ幾度と相
見ての左右の謀り事有ぬ可し云云此たりあり
叶はず因云右の謂ゆる戀志奴夫の方傳十一卷五
十九丁上三百六十丁悲歌の所注せり如し其堪
志奴夫の方俗の許良閑流又堪忍するあり云類是
あり又記傳小忍の字書不能也注せり能音耐小

多布流あり又含忍容忍あり云云皆堪志奴夫あり
又殘忍を惨刻少思也と安於不仁也と注せり
俗の氣強く年異伎あり志奴夫を此意小用ひたり例
ハ無し然れども其堪志奴夫の轉れり意あり心有
不逞強持不發也注せり殊志奴夫と云言不能
當りて隱す意小近し又古書小志志と云小此忍字
を用ひたり見えたり ○如此物言ハ其伊五十田狭之小
汀又三徳之碕の神議御在し坐けり事を答めり云
あり物言と云例ハ元徳宮殿小侍大長谷王之御許
人等白字多氏物云王子故應慎万葉三二十小賢跡物
言從者十四二十小毛乃伊波受伎尔於毛比具流之
母又二十毛乃伊波受伎尔於毛比可祢都毛二十
丁小父母尔毛能波須價尔豆已麻叙久夜志伎拾遺雜

秋小此小何白^二世郎花人の物言ひ性悪^一
き世小源氏帚木^二小思ひ給ひけり隱る^一事なきへ
語傳へけむ人の物言ひ不祥き夕白^三小餘り物
言ひ不祥き罪去所無く未摘花^二小物言ひ不祥き
様ありど浮舟^一小人の隠し置給へる人を物言ひ不
祥く聞え出たりむおも袂衣三中^{十八}小阿那心憂め
御物言^二四上^{二十}小彼物言ひ悪く^一大納言此
院り別當^二四下^{二十}小只大宮院あどの御
膝の上小取替^一扱ひ聞えさせ給へり狀實小世
人の物言ひも叶ひぬ可き^二見えたり^一なり有り

備今も俗小人と口争論の事を物爲^二物言^一すも
云ルバ此の建御方神の父兄の神等共小天神の御使
と問答の御事を爲させ給へるを如此物言と云答め
て己命の其力強きを恃みて此言の出させ給へる小
て記傳小仇て此神バ己の勢力を頼みて詔命小従
トと思せらるる如此云るありと有^二如くあり可^一
又云く物言の是も實ハ此國を天神御子小献む
不を問ふ來つこ能知あり何事云とも知ぬ様小
故小思めけり言あり云ると云ル然れども本なり
此神小知らせ給へる事^二事^一を思漏されたり然
る事強顔し作^二給^一なり○然ハ記傳小志加良婆と訓ハ
其ハ上を兼て云言あり小其事無くて云ふ今世

の俗語ト事ヲ爲スと爲ス際ニ佐良婆ト云フ同ト
佐良婆ト云フ類ナリ是レ言ハ
行ハ上ヲ承ル意有誰ゾ云フ外ハ答メレ
故ニ不明ナ者ト其ハ我國ヲ取ル來ツ
るコト守ル怒ル云フ其心を以テ
然レ我國ヲ取ル云フ意ハ落ル採ト有カ
如シ○欲ス爲ス競ハ記傳ニ知加良久良邊ト訓ハ
一密仁天皇七年御紀ニ富麻邑有勇悍士曰富麻蹶速
其爲人也強力以能毀角申鈞恒語衆中曰於四方求之
宣有戰比我力者乎何遇チカラヲモトメ強力者而不期死生頓得セムトモトメ争力

焉字鏡小指以力相争也知加良久良邊又托舉也
知加良久良邊ト有リ俗今如此云ハ我國ヲ取ル也
バ先力競ハ其勝負を以テ事ヲ定メむル意ハ
補シ見エたり猶力競ハ事ハ色葉字類抄又竹生島
縁起等ニ淺井姫命與氣吹雄命競執争力更去丸邊
下坐海中其下洛音云ハ都布ト故云都布夫島ト有リ
此事を帝王編年記ニ是夷服岳與淺井岳相覽長高淺
井岳一夜增高夷服怒拔刀劔殺淺井岳之頸墮江中而
成江島名竹生島其頸字ト有リ又播磨風土記ニ揖保
郡出水里伊和大神子石龍比古命與石龍比賣命二

神相競川水妹神欲流於北方越部村妹神欲流於南方
泉村尔時妹神踰尔山岑而流下之妹神見之以爲非理
即以指搗塞其流水從岑邊開道開溝流於泉村格尔妹
神復到泉底之川流奪而將流於西方某原村於是妹神
遂不許之而作密樋流出於泉村之田頭由此川水絕而
不流故号元水川也有尔手一切争爲
少つ礼同く力競の例小亮べき事あり
雷児の事を云る小生長九年十有餘頃聞之朝廷有
人念試之來大宮邊居尔時王有力秀當時往大宮東北
角之於別院被東北角有方八尺石力王自住處出取其
石而投即入往處閉門他人不令出入小子視念名聞力
人者是也夜不見入取其石而投益一尺力王見之手搗
攢取石而投從常不得投益小子亦二尺投益王見之希

又靈異
記上卷

亦投猶不得益小子立投石處小子之跡深三寸踐入其
石亦三尺投益王見跡念是居小子之投石也將捉而依
即小子逃云力王然不得捉念自我益力小子更不進
云然後其童子作優婆塞猶住元興寺其寺作田引水
諸王等妨不入水田燒亡時優婆塞言吾引田水衆僧聽
之故十餘人可荷作鋤柄使持也優婆塞彼鋤柄撞秋而
往立水門口而居諸王等鋤柄引乘塞水門口而不入寺
田優婆塞亦取百餘人引石塞於水門入於寺田王等恐
手優婆塞塞之刀而終不犯
○故我先欲取其御手也
我建御名方神小其欲取乞給ひし御手ハ二柱
神小直可けれども此應對ハ古事記ハ凡て武甕槌
神小傳へた此ハ記傳小云礼一如く實小其神の御
手ありけり先右小子引石を手末小撃げ來坐る勢力を
示せむとて先具天神の御使の手を取て打搗々む

速り心の御所為ふ者あり。○故令取其御手者其
御手を建御名方神小取らせし如何小為るべし試
さして給へりなり。○玄氷の記傳小多知毘と訓れたる
小從ふ可し先氷を比と訓仁徳天皇六十二年御紀
小額田大仲彦皇子獵于鬪鷄時皇子自山上望之略中問
之曰在其野中者何窻英啓之曰氷室也略中皇子則將用
凍其氷獻於御所也と見えたる是なり万葉一
九下小磐床等川之氷凝と詠之又玄氷と云事有り源氏末摘
花三十下小朝日指す軒の玄氷の解ふ何れ氷著
の結らるるむ浮舟八十下小垣の本小雪村消つ今

小撥曇つ降る日指す軒の玄氷の光合たる小入
の御形も勝る心りすあじ上より玄氷を云り俗小
此を氷著と一云ハ誤あり氷著ハ地上小落たる水
の艶と氷れを云て別あり和名抄小氷四色字死
云氷寒凍(寒結也)和名比又古保利
古保利ハ凝の義ありと云るハ然る説あり備右の豆
氷之云物の事物小見當らるる頃問出羽國津
代人川口固成我塾小在と語け其國中極
て寒氣の甚しき時小當り山或ハ野小氷氣の
凝聚り地中より突抜け或ハ二三尺又四五尺

大あふ一丈余中及ふに錐の如く尖鋒細く莖
 火より下り立其平立氷^{ツチヒ}と云ふ又氷柱^{ヒシラ}と云ふ無氷
 を逆小為り如き物有り是ありと云ふ然れ説少々
 此実物正自見又云ふ多し此の證小備へ又動も
 可く少くも有けり又記傳小物より虫有る多流此
 と云かく此の下すり立而有氷あり谷川の瀧の瀬ふ
 じ小側り巖入懸れる水おどの下へ墜終り間小凍れ
 るが劔を突植たりむか如く立事有る物ありと
 云北に此の暖國中多し見事少く其類小在
 北に寒國の地少く自然生小疑固氷柱と云實

追加此事書竟る後小出羽國野代人安濃國成の立氷の説
 有り其ハ國成出羽國ハ古傳にもこれあり此と集め記さす
 思ひ立て草摺にも何れと出来ふり吾り野代地
 中昔の程小檜原郡と稱へたり何仁肥内毛布小至
 る郡名と出来ふり物も其肥内火内と此内と書
 来りて名義以り思ひ得難小して有る事少く
 澤と以り不謂る蝦夷詞なり肥内ハ檜澤なる小字
 卿の里名も此立内檜木内檜山に有る共小檜原郡名
 小及不しと地名ハ事考と出来しより彼古事記の
 國平既此立氷ハ物小見當る事ハ能く故大人
 公ハ説小諾りし小聞えさる年頃心小係りたる節あり
 立捨能く可くと思ひ取れり實小動く小捨り有る
 其ハ今世も究めて及ひかた立會の事ハ能く
 ハ立樹ハ能く人ハ言ふこと能く天神ハ
 御稜威ハ恐るる此ハ國神ハ物上ハ甚く別れり御
 畏さぬり力持坐して勢力示せむと先其天神の御使
 手を取て打挫りむと速る所爲乎打折き彼立捨不取成し亦

叙及小取成して天神の奇しむ神し御威徳字可畏中
給へる事と云は伺ひ奉らる事なり大く立氷と
有る有り宗小此かかて氷の事小の事説多作るむい
ありあり立檜小取成し動じもひかすも爲可うう
事被立樹小蟬小譬へるむ能く叶ひて聞えさす
取成し其神の身實小劔小御在し坐りる其任小劔及小
て見えさせ給へる立寄りて立檜の如く如く如く
之得ず近寄りて劔の及小斬りて可くして共小天神の
別れる威徳字震らせ給へり多む御威儀の今も窺ひ見奉る
可く如く古文の妙處と、爰小有る事とて次小若草取
れり如く見えると則こ立檜小對へるとみり檜と以て
と有る是す自然の事千引る序の事とて侍建御名方
神の御力の大なる事千引る序の事とて侍建御名方
雖も天神の御稜威を、甚く可畏き御事なり
檜内の名義の事なり由り可く思ひ得る事なり記し出
るる信こ立檜の考此の證小備へて動く可くす此有る
氷小なり御の説とて削去る可く有る此の證見合む科
小なり御のあり

の立氷小い有は此諸此小立氷小兵器小非れ此
を持撃は物を小碎く可し此は持突が火を刺可

建御名方神の恐れ給事思ふ可し

思寄れる事有る文徳天皇實錄仁壽元年八月庚子
朔壬寅授山城國掘雷氷都久雷湯豆波和氣神從五位
下有る此神の御事傳十一卷十一下注奉此
を今人思ふ小堀雷の堀地を堀あり氷都久氷衝
小氷柱を以て物を突穿てるあり湯豆波和氣の五
百磐別小此堀も衝も別し雷神の御稜威を以て稱
申せらるる氷を以て物を突と云事有り証小七
備ふ可し小此小立氷を云る小由有り聞ゆり
○取成ハ取記傳小此物を被物小變化小其建御
名方神の御手を捉て立氷小變化ありと云れなり今
思ふ小其肥河段小迅速須佐之男命乃於湯津凡擲取

成其童女而刺御美豆良之有^御自取化させ給へるを
申し又枕草紙七十四小何とも思はて云出侍りしを
行成朝臣の取成たるや侍らむと申せば取成すと
てしと打咲じ給へり源氏末摘十小然やうあは住ひ
爲る人の物思ひ知らる氣しう速るき木草空の氣し
う小就ても取成あじし^し以女末摘夫木廿六小然し
也非ぬ時雨おれども玉拍珠小取成す夜の音哉と
有るど甚多き事あるが皆自執行小事を取成すと云
る例あるを思ふ小此の取ら右小故令取其御手者と
有ると別小其建御名方神小令取給へりし御手を

立氷小變化し天神の御稜威を示し可畏させ給へ
る者あり其立氷小取化し示し給へる状ハ玲瓏しく
莊(子)道途遊小頼姑射之山有神人居焉肌膚若冰雪
淖約若處子不食五穀吸風飲露乘雲氣御飛龍而遊於
四海之外云々云事有り神人の身体真小冰雪の如
く清く鮮明なる者と思は然く其御衣を捲げて其
御手を令取給へる上小御力を完じ給へりけむり
其狀の實小立氷の如く見え奉りけるに見ても有る
かむ
○取成劍又ハ先小立氷小變化し示せ給へる
故小退き居り又二度と乞奉れる故小今度ハ劍又
小變化して愈可畏させ給へるあり記傳小劍乃小成
せるハ手觸れ難う令むが爲あり故劍のこハ云
て又こさり心を著せし氷ハ寒^エ返あぐるも猶強てハ

握ヲ可クさニをレ劔ノ又ハ更ニ手ヲ觸ル可ク非ズ是レ前後ノ
序あり云レ川つ予が見レ違ハ其レ始唯御ノ
手ヲ令テ取給へルを立氷ノ變化して握ヲ得堪ざル
くしめ次ハ劔又變化して今ハ其レ取奉れル建御
名方神ノ手ノ又ハ斬ル可ク見え故ハ恐レて退居
ハス小こ有けれ借上四百六十一稜威雄走神ノ御事
小就て注シ奉ル如ク此ノ二神ノ祖御と御在し坐す
其神ノ御身即劔御在し坐すのとあらず何レハ
劔ハ因レル御名あらぬ一柱御在し坐さるを
以テも顯身ところハ成テ天降り御在し坐けれ身實

ハ劔ハ御在し坐ける其本ノ御身小成るを給へる
其任ハ劔又御見えさ給へるを此方より
其變化ハ給へる趣ハ取成る傳入なり者あり
立氷ハ劔又殊更設さ給へるハ非ズて國
神あり上と其甚別ありける御畏さるありつ
むレ記傳ハ此ハ建御雷神ノ例ノ奇一靈一德を
云レ然レ言ふ其天神ノ常を以テも然レ御
有狀あり此方ハ頭身小降るを給へるハ却り
て變化と云べク狀あり事小近ハ考及ばれざらず
説ありけり又ハ谷川翁ハ立氷劔又若草等此蓋其手術
名乃角力之盪鷗也云レ川ノれども手術ノ名あり云
ハ後ノ事ハ神代然レ事を習ひ行ふ可きハ
非ズ○故ハ爾懼而退居ノ懼而於曾礼氏之訓あり

神武天皇戊午年御紀小第磯城惛然改容曰臣聞天壓
神至且夕畏懼カチカシ之有カ如カ佗カ者カ壓カ此カ我カ心カ不カ憚カ
所出來カ此カを云カ小出カたり又長隨カ彦見カ其天表益懷カ歎カ
踏カこカ見カ之カ仲哀カ天皇八年御紀小則見カ御船不進カ惶懼カ
之神功皇后元年御紀小新羅王於是戰カ栗カ屑身無
所略カ新羅王遠望以為非常之兵將滅己國カ龍カ焉失志又
新羅國人悉懼カ不知所如又軍士悉慄カ也雄略天皇五年
御紀小嗔猪從草中暴出逐入猶徒綠樹大懼カ略カ綠樹カ失
色カ五情無主カ繼休元皇前御紀小倭王遠望迎兵懼然
失色カ仍遁山岳不知所詣カ有カ於豆カ於曾流カ同

ト事あり佛足石哥カ小於豆間可良受夜カ有カ有カ倚
此カ先カ小引石を于末カ小擊カ來給カへりカ執カ力カ小ハ
引替カりカ初カ天神の奇カ一カビカ神カ一カ威徳の御在カ
坐カ御事を知カしカ仇カあカ奉カ事カを思カひカ
折カけ給カへカ所カあり退居カ其御許へカ得進カ寄カずカ
了其御坐を退カ給カへカありカ記傳カ小曾伎ハ遠離カ事カ
卷高津宮段哥小曾岐遠理登母カ有カ有カ後方カ曾久
を志理曾久カ云カ故古カあり退カ居カ然訓カ云カ云カ
上カ百九十三カ下カ小云カりカ○尔欲取其建御名方神之手
ハ彼神より然欲為力競カ乞請カせカ小依カ全取給カへ
ウカ返カ一カ小此度ハ其神の手をカありカ○乞歸而取者

ハ記傳ハ初ハ建御名方神先建御雷神之御手を取む
と乞て取つゝ如クハ建御雷神ト亦其建御名方神の
手を取むと乞歸ふを云ふ歸といハて此彼方より爲
し如クハ又此方よりハ爲るを云ふりといハれしハ如
く俗ハ云ふ仕返しを爲る事あり○如取若葦と云ふ
若ハ若招若竹若菰若草などの類ハ物ハ初生り程
形ハ成堅くづゝ間ハ莖葉共ハ甚脆キ物ハれハあり
即此ハ謂ゆる葦牙の事ト心得テ有ぬ可ク記傳ハ若
葦ハ易ク所推る物の譬なり葦ハ竹などの如クハ^年
りりぬ物と云ふ若キハ殊ハ脆ハれハあり建御名方

神の手ハ用ナ引石を撃ぐ計りの力有を如此云ハ建
御雷神の手力の程知べしといハれたり實ハ其子引石
を礫の如ク撃持せし神の手を葦牙を掬むが如ク取
握り給へりハ天神の御力の程^い幾許ハ勝^せ御
在し坐けむ言ハ述へてハ申し難キ程の御事ある可
し^借上ある二の取成ハ武甕槌神の御自立氷劍又ハ
神ハ屬^ハ非^ハなり此ハ其取^ハせ^ハ○^批搯^ハ記傳ハ都
加美比志岐立と訓べし如取若葦と譬へハれハ必此
志岐と云ふ所あり^取要と云ハれたりハ依べし其
日代宮殿ハ朝曙入劔之時持捕搯^裏批而引闕其枝裏

公戀三小山田の苗
代水絶たしと池
の音放たす

公記傳小建御名方神
此より後拾遺記
守使死す法皇向山
三月廿二日字を無訓
れはなり又ハ

又言放と云り後撰戀五小親の守りけり女を否
云放と申けり拾遺記後拾遺五小常ありぬ山の櫻小
心入て池の蓮を云ふ放ちり元真集小云放り君ゆ
過大澤の活詮無き身を不恨むる源氏栢風下小
然るぬ別れ小御心動り給ふる云放り物ゆふ
有る俗小云切を云あり右等皆用ひ様異れども
放り物を別り棄る意小云あり又光を放り身を放
ハ更あり鳥獸虫魚の類九て身小近く傷り○即逃去
有る物を他小物せさするをハ放りハ云り
ハ迹宜佐理伎と訓て下章第四書小兄見之走登高山
則潮亦没山兄縁高樹則潮亦没樹兄既窮途無所逃去逃去

と有る何れ此と同一状あり所あり此言ハ傳十
百七十五下小注せれハ今云限小非ず備此ハ武甕槌
百八十五下
神小其手を若草の如く搔批けりハ給へり小恐怖
れ逃出て此方彼方へ廻走回るるを云と見へり○追
往而ハ其逃去したる後より追手を掛させ給へり
少記傳小建御名方神此御力不愈驚り懼れあがり
猶逃遁れて服従さるが故小追往給ふありと云れた
るハ如く備其神の逃出生を追係させ給へり事今
知べくござるが如く雖ハ唯一絲口を見出たり小
依り悉く小知れり法有り神名式小謂ゆる周防國津

濃郡二俣神社の社傳小建御名方神出雲國小坐一頃
經津主神武甕槌神と戰給ひ一敗軍と成ける時須
波云て逃出來給ひ此二俣神社小來住給ひ一と
云る浮たる説と聞え今二俣村小在り地此邊の伏名を狩野と云
る小鹿野と思しき處由有て聞ゆる小此國名を和
名抄小周防須波と出れる其郷名小熊毛郡周防と
見えたる其より起れる可くむを木の唱
須波ありつゝむ音小依て字の言の添て云習ハ
りる小有めども御紀古事記万葉を小周防と有る方
の古書小波の假字小用ひたるハ古ハ須波あり事

著りけり但須波と云ハ俗説小科野國ありと同一
く其二神小攻詰る給ひ一由小因れる名あり可
傳三十百下小亦く注るハ如く此國ハ大己貴
神以下其御族の神等の御在り坐ける神跡共多りり
けれハ其小便りて逃來せ給へるありけり倭國造
本紀を聞るハ大島波久岐周防都怒の四國ハ在け
る趣あり大島ハ和名抄小大島郡有り波久岐ハ與
之岐を誤れりハ即吉敷郡あり都怒ハ都濃郡有り
然る時ハ玖珂熊毛の二郡より都濃郡の半小係り古
の周防國ありありけり或説小二俣神社祭神八十

今名方東郡名方西
郡名方本名方東
郡名方西其名方東
郡名方西其名方東
郡名方西其名方東
郡名方西其名方東

又神大物主神坐云神階ハ文徳天皇實録小天
守二年三月壬戌朔甲戌在周防國二股神預官社三代
實録小貞觀九年八月十六日壬午周防國從五位上二
俣神授正五位下之所見たり祭神の説右の如くハ建
御名方神の神跡と申すの事云ふハ此ハ紀ハ給ハ
ざる又ハ傳を失へり 出雲より此ハ御在坐
ハ本國より石見國を經て
直小山傳小此ハ來坐つる可也又陸奥國磐城郡
二俣神社鹿島神社有り又桃生郡二俣神社石神社有
を觀跡聞老志小鹿石神社在牛網村高一尺六寸長三
尺其形勢如伏鹿云と持石神社蓋是歟有あは周防
坐小事の似著て間あり又阿波國郡名方郡多初御
奈乃弥神社阿波郡建布都神社式小見えたる由有

げある小就て思ふ小如此く名方と云ふ地名とさへ
成れハ此神の本住坐る地あるり海を渡りて此
所小逃させ給へるを又追逼め給ひ小依て建布都
神社其國小立せ給へるあり可也其多初御奈乃弥
神社今名西郡諏訪村と云小坐と云り又其小海を隔
て向へる小和名抄小紀伊國在田郡吉備郷有り然
る小或書小今日高村の南小接きて名方と云地有り
其小接きて名高と云小有て今ハ一村と成れり俣姫
命世記御遷幸の條小近吉備國名方濱宮四年奉齋と
有る國字ハ後小山陽道の吉備と心得て補へる者小

公其證二方葉九八
上天皇本行天皇御紀
伊國時數十百の中
名部乃浦地入満
島五釣島入千見
事六小謂自二
近江風土記
湯屋神社主田中
毛田等奉天皇
千一月所奉
心者此時
乃有七
小湖
相向

して實ハ此地ありと書せる然も有べし此名
方の地名建御名方神小由有北此方小湊給へ道
次ハ有べし又神名式小山城國愛宕郡須波神社
申す御在し坐し此時の鎮座なりハ非らず也津國
八部郡生田神社名神大月次相嘗新嘗の地主神
下諏訪明神を祀れる其以前ハ此神の主領ける
地ありしハ其後小又伊勢風土記ハ神武天皇東征
諏訪山と云ハ有る御時ハ事トハ逆勅詔天日別命曰國有天津之方
宜乎其國即賜標劍天日別命奉勅入敷百里其邑有神
名伊勢津彦天日別命問曰汝國獻於天孫哉答曰吾見
此國居久不敢聞命奉天日別命發兵欲戮其神于時畏

伏啓曰吾國悉獻於天孫吾敢不居矣天日別命令問云
汝之去時何以爲驗啓云吾以今夜起ハ風吹海水兼波
浪將東入此則吾之退由也天日別命令整兵窺之此及
中夜大風四起扇舉波瀾光耀如日陸海與朗遂兼波而
東焉古語云神風伊勢國常世浪寄國者蓋此謂之也伊勢
津彦神近令有ハ神代の武甕槌神建御名神の事ハ
來任信濃國ハ神武天皇御世の天日別命伊勢津彦命の事ハ一ハ混
ひつゝ傳あり可ハ其建御名方神ハ伊勢津彦命ハ
一ハ爲ハ北ハ良ハ一ハ記傳ハ
此伊勢津彦ハ建御名方神の亦名ハ右ハ故事

ハ即定御雷神の建御名方神を改^改追給へ^改此段の事
あるを神武天皇御世の事と爲るハ傳の誤ある可
其ハ神武天皇御歌ハ神風の伊勢と云事の見えら
よりの誤か^のり建御名方神の此國を主領居給ひ
一由有を以て先此ハ逃給ひ^一高倉山の岩
屋ハ伊勢津彦の住り^一地あり^一神宮の書共ハ記
るハ姑ク隱居給ひ^一信濃ハ去
給ひ^一ある可^一伊勢津彦神武天皇御世の^{神々別}長^一
信濃國ハ必其社ハ有べ^一古^一其社ハ無^一風
祝の事ハ傳有^一持統天皇五年御紀ハ遣使者祭龍田

風神信濃諏訪水内等神と有^一此諏訪神の事あり^一彼
高倉山の續^{高神山ハ}容神社と有^一建御名方神を祀ル
ウ^一神宮の書ハ在^一又風土記の文ハ^一國獻於天神
哉又ハ吾國悉獻於天孫^一有^一此^一建御雷神^一
建御名方神との事ハ全く同ト^一思ふ可^一
ハ^一實ハ奇^一説あり^一其神武天皇大御歌ハ然
詠せ給へ^一古^一諺の有^一依^一詠せ給へ^一者ハ
伊勢津彦命と云^一此建御名方神の事ハ依^一伊勢
と云^一國名の出來ル^一後^一居地ハ依^一成^一神名
あるを以ても前後の事ハ一^一成^一傳^一事^一知

べき者あり然れ此其逃去給へる時の事見
敢おむり其伊勢津彦命申す神武天皇御世の
始小天日別命小攻り此小順ひ奉
武藏國創造祖神伊勢津彦命三世孫弟武彦命定賜國
造と有て成務天皇御世より三四世以上の人る此
神武天皇より後係れり是天穗日命の流り
出雲臣の支流より由傳十卷百十下云
か如し又播磨風土記揖保郡條小所以名伊勢野者云
在山岑神伊和大神伊勢津彦命伊勢都比賣
命英云即号伊勢野伊勢津彦命伊和大神
神大已貴神より其御子小同名有て異神有り此
小其國小御在坐けり多可き由傳三十卷二百四
十九下云○科野國ハ景行天皇四十年御紀武烈天皇
注せり云○科野國ハ景行天皇四十年御紀武烈天皇
三年御紀等小信濃國ハ作り齋明天皇六年御紀及
國造本紀等小古事記の如く科野國ハ作れり初名

抄小信濃之奈と出たり借此國名の起り信濃
風土記小信濃國者往昔建御名方命等之所往之地也
治天下御神大穴持命又少彦名命建御名方命巡行此
國給到坐阿羅野詔此國者木葉草垣葉品也故云品
野今云信濃者音之轉也見えたる是右往昔
建御名方命等所往之地也云此後小諏訪小住坐
るを云右の三神巡行の御事ハ彼國造の古あり
事傳十九百下注る如し其時ハ木葉草垣葉の
種類多き依て品と國と号けり給へるを後小志
那怒と云事小成れり何様音の轉れり小爾心

其國ハ科ト云木の多在る依て其品々々義ハ廢
少ク一種の物名ハ依て号るが如く成れりありけり
諸其科ト云ハ傳十二百九十三丁小注云が如く和名抄郡
名小更級佐良埴科波郷名小ハ更級郡更科級左良
高井郡穂科保之埴科郡倉科久良神社小ハ式小更級
郡波間科神社佐良志奈神社富信神社水内郡毒科神
社見えたり若て科ト云ハ穀カチの一種楮カキの事ハ
即木綿を云る神樂歌木綿作小由不川久留志名乃
波良仁也云々有を以知べきあり記傳小名義ハ山
故の名あり云れ其説冠辞考小見えたり云れ
た少然れども右ヤク風土記の傳ハ更なり其科ト

風土記小誦方地從上誦
方下誦方國字重
十二歩と有る是なるが旨
ハ甚大なる湖がこころ有
つた若し

公其國造ハ託蘇
ハレハ和銅以前ハ何
無ク誦訪國ト云別
國ハ狀々ハ事ハ

云地名の多きを以て科の木の生立ち野ト云義小見
てむるむ宜しき可き上野下野あり木ハ毛野國
ト云て木の生立ち野あり○洲羽海續紀小和銅五年
謂を以て名ト爲る等一○洲羽海續紀小和銅五年
六月辛丑割信濃國始置誦方國ト有り然る小國造木
紀小須羽國造纏向日代朝御代建沼河別命孫大臣命
定賜國造ト有て次小科野國造瑞籬朝御世神八井耳
命孫建五百建命定賜國造ト有て須羽國ト科野國ト
を相並べたりハ當昔二國トて在けるを併る此たり
けむを又此より木の如く二國を置せ給へる者ト所
見たり其後小天平三年三月乙卯廢訪方國并信濃國
ト有る此より一郡の名ト成れりありけり和名抄

小謂也。諫方須。即是多。記傳小名義。須未。機理の
 義ふも。有む。借此小洲羽。のり。云。ず。海と。一
 と云。ハ。道。の。有。ハ。限。ハ。逃。給。ひ。つ。が。此。洲。の。岸。に。至
 り。終。小。道。絶。て。逃。べ。り。方。無。く。窮。れ。る。由。あり。迫。到。と
 云。即。其。意。あり。取。と。云。れ。た。る。如。く。あり。可。し。海。宮。遊
 行。章。第。四。一。書。小。兄。既。窮。途。無。所。逃。去。崇。峻。天。皇。前。御。紀
 捕。鳥。部。万。が。言。小。翻。致。逼。迫。於。此。窮。矣。と。有。る。窮。又。ハ。逼
 迫。ハ。字。共。を。勢。麻。流。と。訓。む。と。須。羽。の。言。と。專。同。小。趣。ハ
 る。む。見。る。可。き。所。あり。け。る。然。ル。ハ。右。五百八
 周。防。國。の。名。義。ハ。此。と。合。せ。て。心。得。で。る。者。あり。と。云。ふ。

其所ハ云。如。須。波。と。云。ハ。逃。出。來。給。ふ。云。と。云。ふ
 須。波。ハ。物。の。起。立。る。時。の。聲。ハ。更。科。日。記。ハ。打。眠。り。た
 る。夜。さ。り。御。堂。の。方。の。須。波。縮。荷。の。場。ハ。印。の。枚
 よ。と。ハ。投。出。す。や。ハ。小。爲。る。小。古。今。著。聞。集。十。小。響。を。持
 建。御。名。神。の。出。雲。を。出。給。ふ。時。の。聲。ハ。無。一。と。ハ。云。べ
 名。ハ。其。ハ。別。ある。者。あり。○。迫。到。ハ。追。手。を。掛。て。其。逃
 回。る。神。を。追。攻。と。し。て。此。ハ。迫。逼。と。せ。給。へ。る。あり。神
 武。天。皇。戊。午。年。御。紀。小。時。道。臣。命。審。知。有。賊。害。之。心。而。大
 怒。詰。噴。之。曰。虜。尔。所。造。屋。尔。自。居。之。因。案。劔。彎。弓。逼。入。催
 入。兄。猜。獲。罪。於。天。事。無。所。辞。乃。自。蹈。機。而。壓。死。又。ハ。皇。師
 大。舉。將。攻。磯。城。彦。略。至。此。役。也。意。欲。窮。誅。と。有。る。如。く。此
 方。の。狭。め。行。て。其。所。を。窮。む。る。由。あり。猶。勢。ハ。云。言

言を奉りて給へ^ル状^ヲ右^ニ引^テ次^ニ章^第四^ノ章^ノ言^ハ兄
既窮途無所逃去乃伏罪曰吾已過矣從今以後往吾子
孫八十連屬恒當為汝排人請哀之^ヲ於是兄知弟有神
德遂以伏事其弟^ヲ見之^ニ又伊勢風土記云天日別命發
兵欲戮其神于時畏伏啓曰吾國悉獻於天孫吾敢不居
其^中遂乘波而東焉^ヲ傳^ハ又崇神天皇十年御紀云其
軍衆宵退則追破於河北^中亦其卒怖走屎漏于禪乃晚
甲而逃^之知不得免叩頭曰我君^ト有^ル命^ト戰^負て攻
逼^ル此^ノ時^ニ叩^頭て伏罪の由を云所ある^ニ此の
状を思及して得^テ所有^スべ^ク有^ル者^ヲ古事記朝
倉宮殿^ノ

伊勢國之三皇妹ハ罪有^テ所^ナク天皇打狀其妹以刀刺
竟其頸將斬之時其妹曰天皇曰莫殺吾身有應白事云
^ト此^ノ等^ト○除此地者不行^レ他處^ニ此地を吾栖處^ト
爲^シて他國^ノハ物^セじ^ト誓約の言を奉りて給へ^ル
ふ^レ次^ニ此^ノ葦原中國有^テ隨^テ天神御子之命獻^シて申^ス此
給^ヘる^ニ加^テ此^ノ諏方^ノ地を我處^ト爲^シて國土の全をハ
天神御子^ノ辭^テ奉^リて給^フり^テ然^ルニ昔^{ヨリ}此^ノ所
の^注を誤^リて此^ノ建御名方神^トだ^シ云^ハ此^ノ其^ノ諏方
の地を離^レて其^ノ顯身^ハ更^ニ小^ト御靈^をさ^シ小
祀^スル給^フ事^ハ成^ル者^ト思^フハ大^ニ有^テ辭^事あり
此^ノ地^ハ已^ニ迫^リ到^リて殺^スむ^ト爲^ス給^フ時^ニ臨^ミ

て然る盟の言を奉る世給ひ國土を悉く天神御子小
避奉る世給へる上ハ外ハ罪する所ハ御在り坐さる
ハ故小其申させ給へる任ハ免許聞えさせ給へる
小ころ有けれ此國を本のか取返り奉るむあて申
さハこころ有め己次小其父兄の神等の命ハ
違奉るま由を申させ給へる其父兄の神等と
諸共ハ天神御子小歸順ひ奉り天津日經を守護り奉る由の誓
言ハ申させ給へる者あり此小就て諸國の官社小
ても祀り奉給ひ又其皇御孫尊の大御守護の爲小
ハ諸神より進みて一速く出給ひて其御功の大

父大神... 國を悉く
奉る世給へる
上ハ外ハ罪する所
ハ御在り坐さる
ハ故小其申させ給へる
任ハ免許聞えさせ給へる
小ころ有けれ此國を本のか
取返り奉るむあて申
さハこころ有め己
父兄の神等の命ハ
違奉るま由を申させ給へる
其父兄の神等と
諸共ハ天神御子小歸順ひ奉り
守護り奉る由の誓
言ハ申させ給へる者あり
此小就て諸國の官社小
ても祀り奉給ひ又其皇御孫尊の
大御守護の爲小
ハ諸神より進みて一速く出給ひて
其御功の大

渡り世給へる御事次ハ其御社の條下ハ書り奉るを
以知で然れハ此時より後ハ國土人民を守り世
給へる御事ハ御在り坐けるを不行
處ハ國を避奉る世給ふ由ありハ知ず
唯不行の有る字ハの目移れるありけり ○亦不違
我父大國主神之命不違ハ重事代主神之言云ハ先
小千引石を擎けて天神の御使の許御小來給ひ一時小
御父大神の御命以て事代主神の天神小歸順ひ仕奉
給へる言を傳へて此神より歸順ひ仕奉る可き
由を宣ひ諭させ給へる事の御在り坐つるむを聞ず
して猶服従ひ奉らず天神の御使小向ひ給へる故小
如此く迫逼り奉給ひけり此小亦其父兄

私
公野明天皇前神紀
以難有...
後從神...
諸言相似...
私

二神の教諭、任小愈歸順、仕奉可き由を畏まり
申さし給へり、ありけり、然れば上より此と同意の文
ハ必有べき、小其所ふて、建御名方神の天神の御使
を拒防す奉る事、續き有、此事を載べし所無、故
小漏されたる者あり、め、此小父神の命を云ひ、兄
神の言を云て、其小不違と有る、先小御父大神よ
り數々の御言共、御在し坐けり、小違ひ無き可き者
不々、然らず、事代主神ハ己小違奉る、給へれど、
御父大神ハ諾否とも、未復命し給へり、
間ある、事代主神不違命、云ひ、
上五百六十七丁、小合せ讀や、
神御子之命獻、云ハ、避奉る、世給ふ由ある事、右の除

公野明天皇前神紀
依此...
神事...
天

此地者不行祀處、下小注、如、猶神社考詳、節、
天孫降臨時、大物主神二男健御名方命、逆命不順、於是
經津主神使、岐神逐之、健御名方命逃至信濃、諏訪郡、降
曰、乞以諏訪郡為大物主之讓、為我有、然則不逆天孫之
命、經津主神告天孫而許與、是今諏方大明神也、
事見舊事記
有、此、今本、見えざる事、あり、此、文を載
て下、小、今、按、此、明神者、事代主之弟也、書さる、ハ、全、く
ハ、古、記、取、ル、者、有、可、但、大物主神と云ハ、和魂
神、坐、世、ハ、此、姑、大國主神と心得べし、使、岐神逐
之、云、ハ、此、第二、書、取、ル、者、有、む、ハ、此、小、逐、行、給

ひし武甕槌神坐す事今云限不非ず請降云ハ
此小謂由多恐莫殺我云この事あり以諏訪郡云ハ
此小除此地者不行他處と有る是あり為大物主之讓
為我有ハ右小引る信濃風土記の趣を以てハ從來具
國ハ此神の父神大より得て知給ふ地ありけむを猶此
諏訪一郡の地別を我有と賜りむ由を乞奉るし
あり可一告天孫ハ此神の事訖て二神天上小上る
し給へし一時天神の大神を以て許與へさせ給ふ由
の御言を持降り坐て其地を治させ給へる事と
知るるあり然れば古の諏訪國云程の地をハ此時

小賜ひて其餘の地をハ悉く天孫に避奉る給へ
りありけり然して此神の其地を賜りて我有と為
させ給へる御心ハハ出雲風土記意宇都母理郷條
所造天下大神大穴持命中來坐長江山而詔我造坐而
令國者皇御孫命平世所知依奉但ハ雲立出雲國者我
靜坐國青山廻賜而玉珍置賜守詔と有る程の御事小
て御在し坐あり可一
然るを世の識者惡き僻り有て
右の除此地者不行他處と云事
の説を慥く見認る事を得ずして諸國小諏訪社
にて多く有る建御名方神をハ祀る可き由無一決め
て阿須波神を祭れる者ありあり云めりハ甚く愚か
りけり事ありけり其阿須波神の説ハ予初めて祝詞
講義小注に出たる事ハ旧説ハ大なる差有る者
あり九て神祇の御上の事小放言する者のハ

甚可畏事 ○神名式小信濃國諏訪郡南方及舞神社
二座^{名神}地神未紀小建御名方神^{信濃國諏方}見
之^大記傳云く持統天皇五年御紀小八月己亥朔
辛酉遣使者祭龍田風神信濃須羽水内等神と有る水
内神ハ帳小水内郡健御名方富命彦袖^神別神社^{名神}
有る是なり社号小依礼ハ此小同神なり右小龍田風
神ハ一度小御使を遣へて祭らせ給ひしを思ふ此
信濃の二柱小龍田と同く風の御祈小有けむ此
神ハ風を祈り給ひし由縁ハ清輔主の袋冊
子小信濃なる岐蘇路の櫻咲小けり風祝小透間有す

ふと云ふ俊頼主の歌小就て是ハ信濃國ハ決めて風
早き所ナルハ諏訪明神の社小風祝と云者を置て春
の始小深く物小籠居て祝して百日の間尊重するを
う備其年ハ風静小て農業の爲吉なり其小自透間小
有り日光と見せつれば風治くず^云悪しと云々
ハ何様小ハ風小由有る事ハ古く云傳へけむ水内郡
小風間神社と云小有り伊勢風土記小伊勢津彦の其
國を避奉る時小大風を起し浪を立て信濃國小ある
迂住ゆる神風の伊勢と云ハ此由ありと云事有る取
と云ルハ然と説小右^{五百九}ハ注せ^ハ如く

伊勢津彦命の事ハ全く此時の建御名方神の故事ニ
テ大風四起扇舉波瀾光耀如日陸海與雨遂乘波而東
焉云事の有る實不然也又思ゆる由ハ其幼少時
の御事を播磨風土記小昔大穴命之子大明命心行甚
強是以父神患之欲適奈之乃到因達神山遣其子汲水
未還以前即發船遁去於是大明命汲水還來見船發去
大瞋怒仍起風波追迫其船於是父神之船不能進行
遂被打破云事も有り其風招の術を得給ひし神也
乃故小風祝を置て御心を和ぬ鎮め奉る事の昔も
傳へり有ける事可し又夫木集小信濃路の風祝
心せよ白木綿花の勻ふ

五月甲午朔丁未幸
信濃國諏方郡無位
從五位下蘇我
上御訪社之神

此水内神下諏訪
神位を遷り上諏
訪社に在り
三位に進む事

神垣の詠り一説ハ其を水内郡風間神社と然也
其事を十訓抄に載せる事詠訪明神と出たれ
然ハ云難シ但其風間神社ハ此社の別社ト風祭
の爲ニ社を外ニ置か諸國ニ風祭社と有る
類あり神階の御事ハ續後紀に承和九年五月甲午朔
丁未奉授信濃國諏方郡無位勳八等南方刀美神從五
位下餘ハ故同十甲月辛酉朔壬戌奉授信濃國無位健
御名方富命前八坂刀賣神從五位下見見ら此法
前ニ有り即后神の御事あり文德天皇實錄に嘉祥三
年十月乙巳朔己未信濃國健御名方命神前八坂刀賣
神並加從五位上仁壽元年十月己亥朔乙丑進信濃國
健御名方富命前八坂刀賣命等西大神階加從三位同

三代實錄貞觀元年
信濃國諏訪郡人金
刺舎人貞長賜姓大明
臣長神八升耳命之裔
也と見えたり

三年八月己未朔庚辰從三位建御名方富命前八坂刀
賣命神祝預於把笏と見えたる此小初て把笏の事有
其祝本より把笏と見えたり又
御崇敬の御事愈勝りて御在り坐か故あり三代實
錄小貞觀元年正月十七日甲申奉授信濃國正三位勳
八等建御名方富命神前八坂刀賣命神正三位同二月
十一日丁酉授信濃國正三位建御名方富命前八坂刀
賣命神從二位同九年三月十一日辛亥授信濃國從二
位建御名方富命前八坂刀目命神正二位と見えたり
侍右小引り共、此南方乃美神社二座の神階ありを
如何ありて、勳位も御在り坐す水内社より一階

位階を、僻心得せり人、有る故、小今委曲、小注、一珊
りめつ取、有る實、小委、一、説ありけり、侍又大同類
聚方六十九、小諏訪樂信濃國諏訪郡南方乃美神社之
大祝白蟲之家之方元者健御名方神之御奇利天下乃
人乃偏九知所、因乃方也、有て此小大祝、云、此ハ其
水内神下諏訪神の、唯の祝あり故、仁壽小始て把
笏せ、一、大祝ハ本より、の著姓あり、故、小己く把笏
せ、家あり、あり可、或説、小諏訪大祝ハ金刺舎人
段小神八升耳命者科野國造之祖也、見えたり、其子
孫あり、三、小、國社、小七月十七日、三佐山祭、有り、其
事を玉葉集、小金刺盛久尾花替く、穗屋の巡り、一、村
小暫里有、秋、御謝山、有る、此金刺氏、決り、其、あり

右の如く慥なる證共有此の上社に建御名方富
命下社に八坂刀賣命小渡りて給へるを信濃風土記
小諏訪郷上諏訪下諏訪社上社所祭八重事代主命也
下社建御名方神也と見えたるに疑はしき事あり然
れども御兄弟の間小坐せば其相殿あど小ハ御在し
坐すべし非可下社の御事ハ和尔雅小下
諏訪八坂入姫命詳繪詞傳と見え近代下諏訪千尋池
より出たる銅政印小賣神祝印と有と云ふども建御
名方神の信神の社ある謂あり然る小此亦異説有
り或書小其社記を引る小月神之子子力男神其子片

倉邊神者諏訪明神也（此等神社考詳第小説）云ひ頭注小下社片倉邊命
是天子力雄命男也と書したるに猶更小心得ぬ事か
り故傳廿二百九十六丁小注るが如く古語拾遺小謂ゆる
長白羽神の御子天物知命其亦名八坂彦命長幡部
の系記小載たれ其御同胞の由を以て八坂刀賣
命と申すと思しけれ片倉邊命を子力雄神の男と
云ふハ傳の誤り有ぬ可けれども次決て八坂彦命の亦
名ふて御在し坐ある又ハ男と云ふ誤りて片倉マ
命の義ふて此八坂刀賣命の亦名ふて御在し坐るむ
と知べしとあり何れ小しむ由有て思ゆら

其戸隱神と聞ゆるハ予カ雄神の御事あり小大同類
聚方八十 小止戎又久礼樂信濃國水内郡健御名方之
神社云々云事ふとの有をも一の証ハ備ふ可
事々りけり若て又熱田社記小高志沼河姫信濃國下
諏訪神社也云事有ハ此ハ右五百五十六小注カ如ク
建御名方神の御祖ハ渡ル世給ハ此ハ相殿ニ成テ
御在ハ坐ガゴの傳有テ云者多ク又元享釋書便蒙
上社健御名方命也下社健御名方命也下社照姫也云事
有リ此等小就テ思ふハ右引カ風土記ハ上社所祭
建御名方神也下社八重事代主命也有ハ社所祭
小混ツカ下社ハ八坂乃賣命ハ坐を誤ルカ又
ハ其八坂乃賣命を主神ハ八重事代主命ハ更ハ
少下照姫命及御祖沼河北賣命も相殿ニ坐ガ

故ハ右の如キ狀異カ 諸此建御名方神ハ此時天神御
子小歸順ハ仕奉ル世給ヒテ國土を守護奉ル世御在
一坐ける中ハ殊小其靈驗の著明ク渡ル世給ハ
神功皇后の征韓の御傳時ハ彼蒙古襲來の時あり世
小名高ク御事あり源平盛衰記四十三小神功皇后新
羅御征の中船中小天照太神ハ二人ハ亮御前を差
添給ハリ其一人ハ住吉大明神一人ハ諏訪明神あり
云々其ハ信濃國諏訪の南宮あり云々斯ク荒人神カ
此ハ新羅征伐の時ハ天照太神ハ差添ルハハ
了取見之たるを神社考詳節ハ神功皇后西征時

公位上郎今位左大臣
神也一神奉崇信濃表
國諏訪郡今諏訪大
神也一神奉崇信濃表
國諏訪郡今諏訪大
神也一神奉崇信濃表
國諏訪郡今諏訪大

公今川了俊 道行
神事記 船の守護
神事記 船の守護
神事記 船の守護

天照太神託以住吉諏方爲輔佐し書し八幡愚童記小
と諏訪熱田三島宗像嚴島神達取合三百七十人鹿島
より四十八艘の舟に乗給ひ此三百七十五人の神達
毎一艘變身同姿云々云々云々凡ての趣に信ずれば
右の神等と共小此諏訪神の行向ハ世給へる御事
ハ實ハ御在し坐けむと思ゆれば正史小記されども
雖ハ古先の傳ふる所疑ふ可き小非ハ事傳十五 三百
ト云々如く右の宗像大神の御助御在し坐し御事
ふと御紀より漏れ三代實錄ハ其事の詳ある小例ハ
思ふ可きなり其上此建御名方神の故事ハ御紀ハ

ハ全小載られざる程の御事なれば猶更ハ其心トハ
伺ひ知べき者あるべき也又後ハ蒙古の征來ハ時の
事ハ太平記ハ都て六十餘州大小の神祇靈驗ハ佛閣
ハ勅使を下され奉幣を捧ぐれずと云所無ハ如此ク
御祈禱已ハ七日ハ滿トけ三日諏訪の湖の上より五
色の雲西ハ聳え大蛇の形ハ所見たり云々八月十七
日辰刻小門司赤間の關を経て長門周防ハ押渡ル兵
船已ハ渡中を指し時然ハ風止ハ雲開カキ天氣俄
ハ替りて黒雲一群良の方より立覆ふと見えハ風烈
しく吹て逆浪天ハ漲り雷鳴霆めきて電光地ハ激烈

中大山と忽小崩れ高天と地と落るゝと夥し異賊七
万余艘の兵船共或ハ荒磯の岩小當りて微塵小打碎
られ或ハ逆巻く浪小打返され一人も不殘失小け
り云々と有ハ謂ゆる神風の御時なるハ此小てハ諫
訪神一速く進ませ給へるなり此事弘安記小信濃
國諏訪の湖より五色の雲立ち西小變びさ云と見
えて全同ト偕我神代より以降國家の大事と云ハ右
の征韓と蒙元寇との二あり其征韓ハ天朝の神威を
海外小耀々一萬國の酋長を臣伏せしめ給ふ大御政
の初なり又元寇ハ皇國を輕侮して諸夷と共小朝貢

せしめむと爲て襲來れ者おれば國家の存亡此一
舉小在る事なり此兩度の神威小依て以來外國より
天朝を窺來る事の無を以てハ神祇の御守護原に御
事ハ知ると中ハ此神ハ此其一神小て渡らせ給へる
を以て神代小已ハ天神小歸順ひ奉らせ給へる後ハ
天神御子の御守護の爲ハ何國までも御在り坐て其
御靈を幸給ひ御在り坐す御事をあじ見奉り知べし
者ありけり此ハ右五百九十五丁小注せるハ如く彼
處云々ハ申し給へる小依て其時より限りて此諏訪
の地より外ハ出させ給はずありめる者ハ固陋ハ
僻心得せざる輩の爲ハ云言ふ
○神名式小信濃國水内
克正一辨ふ可事共あり

郡健御名方富命彦神別神社名神大と有ハ諏訪郡多
別社トテ渡ルセ給ふり此ハ事八坂刀賣命の社
トテハ別小物爲給ハざる狀あり右五百九十九小舉た
正史の神階を記されハ小先小位一等を進めて記
セハ右の諏訪上社の御事トテ次小健御名方富命
前八坂刀賣命ト有ハ此水内神ト諏訪下社の神ト小
テ渡ルセ給へるを此二所の神階何れの時ト伺ハ
故小並載ルれば事あぐ甚混れ易ク所多在り
けれハ右小就テ能見分べきなり彦神別ト申す事御
紀共小御名を舉ルれば小ハ何時ト健御名方富高命ト

リニ有リ大同類聚方八十 小止我似礼乘信濃國
水内郡健御名方之神社云々ト見えたりけれハ別神
小ハ御在シ坐ず此神の亦名ある可クハむを如此ク
重云々例ハ大物主梯懸玉命などハ類なる可ク即持
統天皇五年御紀小八月己亥朔辛酉遣使者祭龍田風
神信濃須羽水内等神ト所見たる水内神是ありけれ
ハ上代ハ甚ク榮々セ給へりありけり然ハ今此
御社絶テ考ふ可クハざるを述ベ小聞ハ今善光寺ト
云々此水内社トテ渡ルセ給へるを中頃佛ト惑ハ
ざる人ハ世ト非ハハ神社トテハ彦詣ト薄ク神職

ふてハ活計ハ甚便無うければ其神社の拜殿を直小
堂と成して佛を前小居て已等ハ頭を刺たうと云ふ
てハ其妻子を帯て祭初ける小大ハ祭昌しける任小
終ハ神社ハ億ルさせ給ふ如く成れり也雖も今ハ猶
佛前ハ神供を備へ幣帛を捧げて春秋の祭を爲す
狀ハ神社と異る事無しと雖も今ハ其佛の祭を何ハ
依て神小仕ふ如く爲る事とし知す成以て行は唯
古例を守りて異しき祭を爲る事ハ人皆思ふ至ル
り云り江戸の淺草の觀音ありて神社あるが故ハ
其胡神ハ表ハ立て賣物と成れりとし内實ハ祭事ハ

神事ありて此と天下ハ二所のミズ神を賣小佛を以
て物爲る所ハ有ける神の御心の長閑ハ御在り坐計
う允人ハ心ハ測奉り及ばざる者ハ有けり事ハ因ハ
淺草の觀音と云ハ少彦名命の龍ハ糸ハ給へる金
像ありと云り又一説ハ神名式ハ謂ある埼玉郡前五
神社二座御在り坐す其神体決水の時ハ流給へるを
引上奉りて此ハ祀りて云り然る時ハ幸魂奇魂神ハ
坐セバ殊ハ尊ハ倍此ハ名高き觀音あり事ハ人皆知
る事あり人ハ參づる晝間わたり佛あり申時より
ハ幣帛を捧げて神とし又六月十五日ハ神樂を奏
し神事を行ふと本地ハ神ありて密跡ハ佛ありて如
善光寺の狀ハ如此ハ皆善光寺ありて妻帯の坊舎ハ
三十六院有て若麻續連又ハ兄弟部あり何れハ名高き
著姓の子孫ありとあり此頃世中ハ狀ハ大ハ異りて
皇國の物と云へハ人皆同劇ハ買ぎるを好高の類
其人情を知て皇國の物を洋表あり舶來ありと云掠
むる時ハ價ハ尊く買人ハ多しと云神を賣るハ如此

くして若を外國に假る時ハ俗人の信仰ハ深くある
ことありて事ありけり誰ハ此を悲しむべきと
又式小更級郡武水別神社名神に有る水別を美豆和
氣と訓て別神と爲る事小に在れども美那和氣と訓
べし即武御名別神と申す義ありけりハ三代實
錄小負觀八年六月甲戌朔授信濃國無位武水別神從
二位と有て無位より如此く進ませ給へるハ殊あり
けり神驗の御在り坐ける小依れるハ又ハ斯計ハ大
神を諏訪水内ありハ甚く後ハ給へるを思ふハ御
在り坐ての御事ありハ同九年三月廿六日丙寅詔
以信濃國從二位武水別神列於官社と見え信濃地各

考と云物ハ今御贄川有り祭の御贄の地あり可しと
云り又一説ハ此社を姨捨山近き處あり此より北
一里半餘ハ御幣川村と云ハ御贄川有り云り又
水内郡風間神社地名考ハ今風間村ハ在りハ幅と稱
すと云り右五百九十九ハ云ハ諏訪社風祝の事思合す可
し又國佐久郡長倉神社を社説ハ建御名方神とて
凌りせ給ふと云り右ハ信濃國ハ建御名方神を祀
其外ハ式社ハ其祭神の知るれハ社ハ物ハ見えハ較略あり
給ハざり中ハ有ぬ可き事共あり○建御名方神を
祭ルハ御社ハ猶神名式ハ山城國愛宕郡須波神社此
御事ハ右五百八十八ハ注ハ奉ルハ大和國高市郡飛鳥坐

神社四座 並名神九月 社説小事代主命建御名方命高
 照姬命下照姬命云々然ルハ天下此神を祀ル
 社此甚止事無此社此當社の御事傳
 十五三百七三十七百十十下下 小注奉ル又神名秘抄度
 命宮附屬の中客神社信濃國諏方内明神是也一名
 号御馬屋神也此有此事小就右五百八十云云説
 共有考合可又彦河國神名帳小從四位下須羽
 南宮明神坐設樂郡有一本南を大小作れり
 諏訪上社を南宮と申せる其号を此に用いれる大
 宮と申しても非多り可今大宮村名座神社の

末社小南宮明神有り是か可し若し其社
 上百二十下下 小注此天推彦神此坐せ由
 有御事ありけり又從五位上須波天神坐設樂郡
 見えたら今諏方村諏方社是あり又神名式
 小遠江國磐田郡須波若御子神社今見附驛中泉
 村小上路傍小諏訪明神の小祠有を和田子と申す
 云上野國神名帳小從三位諏訪若御子明神有り
 又神名式小謂下野國河内郡二荒山神社名神性
 靈集便蒙小祭大已貴與健御名方為本宮新宮云云
 式社考小大已貴命小八重事代主命健御名方命

日本書紀傳三十一
 〇六百九

合也祀る云此郡事傳三十一六十四丁七小本
注せり○神名式小越前國今立郡須波阿須疑神社三
座に有る須波小建御名方神阿須疑味耜高彥根神
小坐り今一座は何れ神を尋ぬ可き事あり能登國
鳳系郡神目伊豆伎比古神社右五百五小注り如
く神目の稜威くくしき由を以て負せ奉れり御穂
須と美命又ハ火明命と申せり小等しく御心の甚く
進之健ひ給へり由あり本より亦名小御在り坐り上
小此所即其御座所をれば殊小御靈を留めさせ給ふ
可し又此小香島と云地名の有る所以有る事あり

可きよ○式小丹波國何鹿郡須波伎部神社阿須
伎神社と並給へり此神々但三代實録小貞觀
十一年十二月八日辛卯授丹波國正六位上物部篁掃
神從五位下之所見たり別神と聞ゆ又但馬國養
父郡屋園神社頭注小諏訪同と有る今小諏訪明神と
申せり又出雲國島根郡美保神社右五百五小引り
風土記小御穂須と美命是神坐矣故云美保と有る如
く始此神々位世御在り坐り地多る故小神名を
以て地名と爲るあり即美保社と出た所奈御穂須
と美命と左右小大己貴神奴奈宜波比賣命坐り云り

古蹟官
内庫

圖書
印

其未官知小三保社と有り事代主神及百八十一神を
祀れりといハ云ある但願注小美保神社三徳津姫命一
座事代主神と云なり猶能正す可き御事あり小こり
又大社志を見り小杵築大社小客座五神と申す御在
し坐り味耜高彥根神下照姫命事代主命高照姫命建
御名方命と有り此神も其列小入り世御在し坐すハ
然も有ぬ可き御事あり其外諸國小諏訪神社と申す
が多く立世御在し坐す何れも榮命を給へりハ國土
の御守厚く御在し坐す故ある事申すも更あり其を
或説の如く一ハ小阿須波神を奈り誤れり者も爲り

